

## 第2回 アクティブステージ研修

令和5年10月23日(月)

講演 「遊びの中にある子どもの育ち・学びを読み取る」

講師 京都教育大学 准教授 佐川 早季子氏

### 1. 事前課題「保育の中のワクワクの一場面」の写真を用いてグループで語り合う

ワクワクの一場面を選ぶポイント・・・  
子どもたちとかかわって発見のあった場面を自ら再発見するように  
子ども達と関わって発展のあった場面  
➡ 驚きや発見が重要な手がかりになる

### 2. 佐川先生講演 「遊びの中にある子どもの育ち・学びについて」

#### ◇ 保育の中のワクワクの一場面を写真に撮る

そのワクワクの一場面には、教育的瞬間（こんな力が育ってほしい、育ちかけているかもしれない等、子どもに対して何らかの教育的な働きかけが期待される瞬間）を保育者が感じている可能性がある。

子どもが夢中になる瞬間や、保育者のアンテナに引っかかる瞬間には必ず意味がある  
子どもが遊び込み、“いきいきワクワク”しているところには必ず育ちや学びがある

ワクワク感の情動体験（秋田喜代美先生の言葉より）

保育の難しさ、困り館と面白さや手応えというワクワク感の情動体験  
（自分の気持ちが高まる、高ぶる体験）が保育者の根源で専門性を支えている

ワクワク感や子ども  
たちと一緒に楽しむ  
気持ちを忘れずに！

#### ◇ キラりと光る姿からとらえる子どもの育ちや学びを語る（グループワーク）

##### ① 一人ひとりの「その子」の育ち・学びについて語る

一人ひとり顔と名前・人格を持ったその子自身を理解しようとする姿勢で、その子に育ちつつある力、「学び」の芽生えを自分の言葉で語る

語り合いの中で保育者の「私らしさ」が作られていく

自分の言葉で語る中で、自分の大切にしたいものが見えてくる＝成長・創造する上での「孵化期」

##### ② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を通して語る

自分の言葉で語り合いを経た後に、「10の姿」という窓を通して、子どもの育ちと学びを整理する

語り合いの中で、十分に育ちが見えたところ、また語る中に出てこなかった姿、見落としていたところが窓を通すとわかる場合がある

#### ➤ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を使う上で知っておくこと、考えること

- ・幼児教育で資質・能力の基礎がはぐくまれ、小学校以上で教科等の指導によりそれが成長していく。
- ・10の姿は幼児期で特に伸びていく5領域の内容を10に整理したもので、年長児後半から小学校、さらにそれ以降にかけて成長していく様子が10の姿を通して示されている。

- ・最初から10の姿に結びつけて保育するのではなく、今、目の前にいる子ども達に育っているものを見つけ「こういうところにつながるかもしれない」と、方向性を見据えて環境などを整える。

➤ 留意点

- ・「思考力の芽生えを鍛えるためにこんな遊びをします」というようにトレーニングのように使うためのものではない。
- ・すべての幼児に同じようにみられるものではない。また、5歳児に突然見られるようになるものではないため、発達していく方向を意識して、その時期にふさわしい指導を積み重ねていく。

3. グループ発表 (9グループ中、3グループ発表)



①グループ

2歳児が犬と飼い主の役になりきって遊ぶ姿から・・・

- ・犬を見た(知っている)経験、犬と飼い主になりきって遊ぶ姿、やり取りの中に役割が出来ている…思考力の芽生え
- ・なりきってやり取りする姿、友だちとの関わりの芽生え…社会性、協同性、豊かな感性と表現
- ・見たり聞いたりして真似てみる…言葉による伝えあい
- ・友だちの姿を見て「楽しそう!やりたい!」と心が動く瞬間…協同性



②グループ

乳酸飲料の容器にフウセンカズラの種を入れ、フタを閉めてひっくり返すと、種がフタに隠れて見えなくなった。それをマジックと感じ、友だちに伝えた。

- ・気づきを伝える…言葉による伝えあい
- ・気づきを友だちに伝え、クラスでマジックショーを楽しむ…協同性
- ・フタに隠れると種が見えなくなる(消える)…思考力の芽生え
- ・種が消えたことをマジックととらえる…豊かな感性と表現

③グループ

4歳児6月。雨が降った後に築山に道が出来ていて、バケツで水を流してみても上から下に水が流れたことに気づいた。大きさの異なる道具を選んで水を流し、速さの違いを伝えあっていた。

- ・「早く流れた」「ちよろちよろと流れた」という言葉を遊びの経験から学んでいる…言葉による伝えあい
- ・自分なりに道具を選んで遊ぶ…思考力の芽生え

佐川先生の講評

- ・子どもの姿に育ちや学びを見取り、10の姿の言葉を借りながら、自分の言葉で語る
- ・解釈や事実を拾って語る。事実を束ねて解釈することを忘れずに
- ・10の姿に頼らず、その時の子どもたちの育ちや学びを言葉にしていくことが見取りの力につながる
- ・しっかり見取り、言葉にしていくことが、日々の保育の中の瞬時の判断の見取りにつながる
- ・日々、保育を少し振り返って子どもの育ちや学びを感じ、考える習慣を身に付けて頂きたい

4. 参加者の声や気づき

- ・1回目と2回目の研修内容が繋がっていたことで、理解が深まった。
- ・話すことでより自分の思いがまとまり、他の意見を聞くことで多様な考え方を知ることが出来た。

作成者 幼児教育アドバイザー 杉村 奈奈子